

-2022-
12月

東京都 145号 NEWS

介護福祉士会

特集

ICTの活用と 次世代介護機器の定着まで



TOPICS.....

- 1 巻頭言 : 副会長 小幡 真也 P.1
- 2 特集記事 : ICT の活用と次世代介護機器の定着まで P.3
- 3 研修報告 : 「新しいテクノロジーの導入で介護現場は変わる」
報告者 : 広報部員 田中 宏実 P.13
- 4 スキルアップインフォメーション・編集後記 P.14



巻頭言

今ある命とは？

小幡 真也

東京都介護福祉士会

副会長

東

京都介護福祉士会副会長の小幡と申します。ここ最近の近況の報告となりますが、2022年8月23日に父が急逝しました。昨年の9月に要介護3になった父。少しずつできなくなることが増えてきた父。普段は老健の介護長として勤務している私には今後の父がどのように最後を迎えるか想像はしていました。起居動作ができなくなっていた父が次にできなくなることは座位保持か？立位動作か？そしてトイレに行けなくなり、ベッド上での生活が多くなるのかと思っていました。介護保険を使用する事に対してかたくなに「俺を年寄扱いするんじゃない」と言っていた父に何とか説明して、同意のうえでショートステイと訪問介護、訪問リハビリを利用して自宅で生活するようになりました。私は同居をしていないので母親が父の介護を実践していました。私は週2～3回実家に帰る生活をしていました。父が最初に利用したあるショートステイはあまり父に合わなかったのか「もう行かない」と言っていました。仕方なく私が働いている老健のショートステイ

を利用することになり、何とか利用が続いていました。父は自宅で「次はいつ行くんだ？」と楽しそうに母に言っていたそうです。そう思わせてくれた現場職員に感謝の思いしかありません。

その父が8月10日に私の勤めている施設に長期入所をしましたが、8月中旬に誤嚥性肺炎の診断で入院しました。私は重症ではないので改善したらまた施設に戻ってくるであろうという思いで過ごしていました。8月23日の昼前に主治医からなかなか改善しないとわれ、お昼過ぎに父の面会に行きました。父と握手をして会話を数分間かわしました。最後に聞いた言葉は「俺、今回ばかりは死ぬかと思ったよ」という言葉でした。「俺もそう思った。もどってきてくれてありがとう」というのが親子の最後の会話でした。その日の午後に父が急逝したという連絡を受けました。混乱をしながら車を運転し、独り言のように「なぜだ？」「さっき話したじゃないか？」と声に出していましたが、なぜか思い出されるのは父が私の車の中で起こしたエピソードばかりでした。環七を運転中に「う

んこがしたい」と言ってこちらを見ていた父。あと数百メートルで自宅に着くのに「出ちゃった」と言っていた父。排泄の話しか思い出せないことに思わず笑いながら「うんこばっかりやな！」と一人で突っ込みを入れるドライブを経験しました。

さてここからが本題です。あんなに元気に話していた父が数時間後に亡くなることを誰が想像できたでしょうか？ 私たち人間は死亡率100%です。当たり前かもしれませんが、このことを理解するには体験や経験が必要なのかなと思っております。いずれ必ずこのライフイベントに誰しもが関わります。避けようのない事実ですが、私たち生きているものは受け入れるしかありません。いつお迎えが来るかわからないその事実に近い所にいるであろう人が皆さんの職場においてもいらっしゃるのではないのでしょうか？ 新型コロナウイルスが蔓延して、あの頃のように会えなくなったこの時代に私たち介護福祉士がご利用者にできる事とは何でしょうか？ もちろんあの頃のように直接いつでも会える環境を整えることが一番良いと思いますが、事業所によって対応は変わります。以前インタビューさせていただいた井川裕覚氏は「直接会えるという事は尊いものである」と言っていました。その支援をしている私たちの仕事は尊い仕事であると言えるのではないのでしょうか？ 普段の当たり前を支援するという事は、実はとても大変であることは会員の皆様はご存じだと思います。私は父の一件から当たり前を支援する事こそ介護福祉士の醍醐味ではないかと考えるようになりま

した。「会えること」「触れ合えること」「話せる事」「目と目が合う事」それだけでも尊い事なのだと思います。私たち介護福祉士はこれらの尊いことをしっかりとご利用者とご家族を繋いでいく事が必要ではないかと思っております。体現できるように、伝えていけるように日々精進を重ねていくという気持ちにさせてくれた父。本当にありがとう。





ICTの活用と 次世代介護機器の定着まで

左から小寺様 / 中田様 / 鮫島様

吉水 千賀子 様：特別養護老人ホームフェニックス杉並 施設長

小寺 喬之 様：施設長秘書兼生活相談員

中田 圭祐 様：フェニックス杉並で介護主任として勤務

鮫島 真弓 様：ユニットリーダー



毎月第4水曜日にオンラインで行われている東京都介護福祉士会広報委員会の紙面会議の中で「全床に眠りSCANを導入しているというフェニックス杉並という施設がある」という情報を入手しました。今回は当会会員の小寺喬之（こでらたかゆき）さんを訪ね、フェニックス杉並の取り組みについてお話を伺うことになりました。

法人概要



フェニックス杉並を運営している社会福祉法人暁会は山口県下関市に平成8年1月に設立されました。山口県内で高齢者・障がい者・児童向けの様々な事業を展開していましたが、平成26年4月に東京に進出。メディカルケアタウン東大島、特別養護老人ホームあかつき苑、都市型軽費老人ホームあかつき苑を開設しています。今回のフェニックス杉並は令和3年12月に開設した特養です。開設から先端のICT設備の



導入や、全室導入の「眠りスキャン」により、いち早く心拍数や呼吸数を測定し、体調変化を素早く確認することができるようになったそうです。インタビューに先立ち施設長の吉水千賀子（よしみずちかこ）様にお話を伺うことが出来ました。

【広報部】

山口県で活動されていたとの事ですが、なぜ東京へ進出されたのでしょうか？

【吉水様】

私はずいぶん前から「介護は科学的根拠をもって仕事をするべき」と考えておりました。時代が少しずつ介護の科学的根拠に視点が集まってくる中、次の一步はこの考えを世界に伝える事ではないかと思っています。そのためには日本の首都である東京でしっかりと科学的根拠に基づいた介護を行わなければと思いました。

【広報部】

そこで次世代介護機器やICTを導入されたのですね。

とても情熱的にお話しされる施設長と暫くお話をさせて頂いた後に、小寺さんと一緒に施設を見学させていただきました。

地上6階地下1階の建物の中に、①特別養護老人ホーム②短期入所生活介護事業所③看護小規模多機能型居宅介護④防災拠点型地域交流スペースが入っていました。

【小寺様】

防災拠点なので有事の際にはこの交流スペースには70名程度が入れるようになっています。勿論何もないことが

一番ですが。何もない時はレクリエーション等、地域の活動にも使用していただいています。

インタビュー時も特養にご入居されているご利用者がピアノを披露していらっしゃいました。一緒にフルートを演奏していらっしゃるの、なんと事務局員との事でした。



【広報部】

ご利用者の生活に寄り添うために何か工夫をされているのでしょうか？

【小寺様】

直接的に介護に携わらない洗濯物の管理やシーツ交換などの業務をすべて外注しているんです。なので時間の捻出ができると思います。

【広報部】

それはすごい事ですね。私は本来、介護福祉士はその人に寄り添って、今日の気分に合わせて一日をその人と一緒に過ごす事や、その方の3ヵ月後の未来を引き出して、今日をどのように過ごすかと言う部分を具現化することが仕事だと思っているのですが…。

【小寺様】

なので介護職がそのような仕事ができるように、外注で対応しています。今取り組んでいるのが障がい者雇用です。私がジョブコーチとして企業内職業訓練を進めていこうとしています。出来る事はたくさんありますが、全部をしようとするのが難しいという場合がありますので、施設の仕事を細分化してお任せする方法を検討しています。



(ガーデニングを障がいを持つ方をお願いしたいと言っていました)

【広報部】

働く人をどのように集めるかと言うのはどこの事業所も悩んでいると思います。私は直接的介護と間接的介護と呼んで言いました。

【小寺様】

私は医療刑務所で働いていた時にできない事があるために居場所がないという人をたくさん見てきました。でも、できることもたくさんあると思うんです。そこを何とか提供できないかという思いがあります。やはり、居場所や働く場所があるというのは違います。働けば賃金が出て、定期的に毎月もらえることで生活の基盤ができるということです。うちは障害者さんも一般も変わらないお給料体系です、処遇も。そんな障害者だからと言って区別しないということです。働き方もかなり重要な考え方ですね。この間の障害者さんの第1回目の面接に僕も立ち会いました。施設長は「休みたかったら休めばいいよ。来れる時に来て、そこから8時間働けば。それが夜だろうとなんだらうとそっから8時間、それだけでいいでしょう。」と言っていました。

なんとも革新的であり、障害の特徴をしっかりと理解しているからこそその柔軟な対応ができると感じました。

特養としてはユニット型特養で最新のアイテムがしっかりと導入されています。寝台浴槽はミスト浴となっており、ストレッチャーはマットではなくネットになっていました。仙骨等が突出している方など、体のラインに合わせて沈み込むため、体への負担が軽減できるそうです。



の定着」に対し、どのような形で進んでこられたのか、今回は介護主任の中田様とユニットリーダーの鮫島様にも同席頂きインタビューをさせて頂きました。

【広報部】

すいませんお時間ありがとうございます。今回ここにお邪魔させていただいた理由は、今次世代介護機器、ICTの普及が始まってきていますが導入したけどうまくいかない事業所があるようです。貴施設ではどのように運用されているのか？またどのような壁に出会い、どのように乗り越えてきたかお話を伺いたいと思います。

中田さん、鮫島さん：よろしく申し上げます。

では一つ目の質問です。施設が開設され7か月目となりましたが、オープニングスタッフさんはすでに慣れているとは思いますが、そもそもICTや介護ロボットに対しどのような思いがあったのでしょうか？

【中田様】

そうですね。オープニングで入ってきた職員に関してはそもそもどういう機器がどの程度入っているのかいうところまではわからない状態だったのです。実際にこの建物に入って、眠りSCANが全床入っているのだと知った状態です。ですので、ICTに興味を持って入ってきたというよりはオープニングで1から自分の力を試してみよう

またテラスからは雄大な景色が見られ、ご利用者、職員からも癒しのスペースとして活用されているようです。



様々なアイテムが導入されているフェニックス杉並の中でホームページにも載っている「全床眠りSCAN導入」「CAREKARTEの導入」等、先端のICTを導入されています。さて今回のテーマでもある「ICTの活用と次世代介護機器



という職員の方が多かったのかなと感じます。後から入ってきた職員に関しては面接の時点から志望動機でICTを導入していることをいっていましたから、それなりに興味を持っていたと思います。

【広報部】

そもそもICTと言うよりはオープニングでやってみたいという職員と、ICTに興味を持ってきている人がいるということが分かりました。では、実際に眠りスキャンとハナストを使ってみて、最初の印象どうだったのかなというところを聞かせいただけますか？

【中田様】

眠りSCANに関しては、起き上がりや離床で音が鳴る設定ができますので、最初は眠りSCANの本来の目的よりセンサーに近い状態で感覚的に使っている職員の方が多かったように感じます。離床を知らせる音が鳴る時間が遅いからキャッチできないというような相談が多かったです。本来眠りSCANは、その方の眠りの質を睡眠日誌や、心拍数日誌というデータで眠りの質を可視化して、支援するタイミングを検討するツールです。ここ最近では睡眠日誌や心拍数日誌を見てもらいながら説明をしています。スタッフからは徐々に「こういうので見ていくんだ」「全然寝ているようで寝てなかったんだ」というのが少しずつ広がってきていると感じています。どうしてもフットセンサーとは違うので振動が収まってからじゃないと検知しないの

で、鳴った時にはもう既に居室の外に出ていたりすることがあります。そうじゃなくてあくまで目安として、その起きた時間を確かめる事や、睡眠日誌上で黄色くなっている部分は眠りが浅くなっているから、そこをちょっとピンポイントで注意しておく時間だと捉えるんだよと言いつけています。

【広報部】

そのずっと言い続けられた秘訣はありますか？

【中田様】

事故に関しては事故カンファレンスが必ずあるので、その時に眠りSCANの性能や効果的な使用方法についてお話しています。

【広報部】

いや、大きな工夫だと思いますよ。眠りSCANってというのはこう使うんだよっていうアプローチの方法、この発想に何か至った経緯とかあるんですか。

【中田様】

以前に働いていた施設で眠りSCANは導入していたんですけど、活用がうまくできなくて。それを外しちゃってほこりが被っているユニットが結構あったですね。その時も業者さんの方からも活用方法の話は聞いていたのですが、これをどうやって活用したものかなっていう思いは持ってはいたんで

す。フェニックスに就職してからも最初のうちは口頭だけで言っていました。しかし、センサーとしての機能の認識が1人歩きしてしまって。どうしようかなって考えていました。事故のカンファレンスをする前に自分で何気なくデータをぼーっと見ている、ああ寝てないんだな～なんて。その時にこれで使ったら少しはわかるのかなとひらめきました。そんな深く考えてはなかったんですけどね(笑)。最初せっかく全床に入っているからどうすれば使えるようになっていくかという思いだけがあって。それを広げていったらいいかなっていった時に、カンファレンスの中で実際にデータを見せたらどういう反応をするかなっていうの、純粹にただそう思っただけなんですよ。

【広報部】

知っていたっていうのは大きいと思いますよ。その経験から出た発想なんだって今聞いていてすごく納得しました。一方で眠りが分かるのであれば巡視に行かなくても良いというような考えに至った方はいませんでしたか？

【中田様・鮫島様】

あはは。

【中田様】

出ました！あります！実際にでも可能は可能だと思います。重説(重要事項

説明書)で記載があれば。実際に夜間は2回の巡視であとは眠りSCANのデータが入ってればいいんですけど。ただそれをやるのであれば、その使い方をちゃんと全員が理解した上で危ない時間を把握することができるようになって、その時間は目視に行きますっていうルールがあった上で、業務を実施していく。夜勤は少ない人数でやっていくのでその業務負担を減らすっていうところでは、活用方法さえわかっているればそれは有効に使っていくべきかなうは思っています。

【広報部】

ただ道具を入れたから巡視なしよっていうような考えは？

【中田様・鮫島様】

もっと事故起きるだろうなと思います。実際に動き出しの検知スピードはセンサーと違えばタイムラグがある。そこに頼ってしまう使い方をしていくのは多分危険でしかないの、それは避けた方がいい。有効に使おうと思ったらやっぱりそのシステムをちゃんと理解していかないと危険かなと思います。

【広報部】

素晴らしいお考えだと思います。
中田さんは介護歴長いんですか？

【中田様】

20年弱ぐらいですか。介護をやる前はバーミヤンの店長やっていました。厨房で中華鍋振っていました（笑）。

【広報部】

バーミヤンの店長がそもそも何で介護やろうと？

【中田様】

バーミヤンの後、いったん倉庫業やっているんですよ、1年半ぐらいちょっと。外食ってやっぱパートさんが多くてガヤガヤしていて、ちょっと人が嫌だな、1人になりたいって。だから倉庫で1人黙々とフォークリフト操作していました。そしたらその寂しくなっちゃって。どうにも寂しいんですよ（笑）。たまたまうちの母親の知り合いで、特養の施設長をやっている人がいて、ちょっとフラッと見にいったら、その方が「いつからこれんの」って言われて。倉庫業は寂しいしちょっとやってみようかなって言って、今に至っています。

小さな成功事例の積み重ねを繰り返して今の状況に至った経緯がよくわかりました。特に中田さんの熱い想いに話は盛り上がります。



【広報部】

実際あとはハナスト(介護記録、連絡、申し送りなど、介護スタッフの間接業務をAI×音声入力でサポートする、現場の声から生まれたAIアプリ)。
これはいつぐらいから入っているんですか？

【中田様】

最初から入っていたのですが、やっぱり不慣れだったのと、あとは多分、恥ずかしかったよね。喋らなきゃいけない、だったらスマホとかでも送れるし、またタブレットもあるし。今の人たちは慣れているじゃないですか。だから人前でブツブツ喋るよりは、向こうで入れたほうがって感覚が多分多くて。一旦全部のユニットからインカムが上の棚に・・・。

【鮫島様】

さっき仰っていたようなことがあったんです（笑）



【中田様】

一旦ステイしようという時期が結構ハナストの方が実際長くて。せっかくいい道具があるので、業者さんにも定着化メンバーに入ってもらいました。どれだけ便利なものかという事を今日来てもらっている鮫島を含めたユニットリーダーと話をしてもらいました。またサービス残業で出てくる記録の負担については、話してその場で記録が入るのだったら（残業）減るよねとか。リーダーがまず知ってやっていくっていうところで広げていこうっていうのが4ヶ月ぐらい前からです。業者の力を借りて始めたところになっていて、でもそれでもやっぱりまだ埃をかぶっていたんです。全部を巻き込んでやろうとすると、ちょっとこれは無理だなと思って。今は鮫島のユニットと、5階ユニット、まず少ないところのユニット限定で実際に使ってもらって、どれだけ便利だったっていうのを体感してもらっている最中です。

【広報部】

なるほど、使ってみてどうですか。

【鮫島様】

私も正直最初は本当に恥ずかしくて。「ヘイ、ウイズ」って言わなきゃいけないんです。恥ずかしかったのですが、でも今は楽ですよ！まずタイムラグがなくなる事です。夜勤は1人なので、例えば1時間に6回トイレに行く方がいたとして、その合間に他の方の支援を行って


いると、記録を携帯で打ち込むのも大変です。ハナストは支援しながら記録が入力できるんです。次の人へ行かないしゃいけな時でも話せば記録になりますし。服薬に関してもその場で入力できるので、タイムラグもなく時刻も飲んだ時刻がそのままデータになっているわけです。改良に改良を重ねて今はいろんな単語でも記録として入ります。陰部洗浄とか言葉で言ったのが全部入ります。また排泄っていう声が大きいと聞こえてしまうので、それを排便は「○」排尿は「□」量は123ときめておけば①（まるいち）を言えば記録として入るようになりました。ハナストのような新しい機器は、現場の意見と業者さんにも入ってもらいながら時間をかけて使っていくことによって、良さをわかってもらうっていうことが大切です。まだ全員が使っているわけではないのですが。ただ使用していくと新たな問題が出てくるんです、充電切れ問題とか（笑）。そういうところを意識していかないと朝使ったときに誰も充電してないと使えないとかもあるので、意識も変えていきたいなと思います。

【広報部】

ハナストを入れました。残業時間数は使い始めの今と使わなかったあの頃と変化ありましたか？

【中田様】

ありますね。大きいのはやっぱり30分ぐらい変わってきちゃいます。



【鮫島様】

あと、排泄の記録が漏れているところあると思うんです。何度も行く方だと「あれ何分に行ったっけ」というのも後で入れるときに全部が全部拾えてないですね。実際はこの方は何回行って、排尿量が少量とか全然出てないねっていうのは一応全部入れられるのでそのデータを残すことはできるから。

【広報部】

例えばユニットさっき見せていただきましたけど、Wi-Fiがここら辺弱いよねとかありますか？

【中田様】

使っていく中でそういうのもわかるようになります。結果Wi-Fiが今うちどれだけ充実してるのかもわかってくるし、さっきの充電もそうですけど、実際使ってみないとどれぐらいもつのかもわかんないそうですね。

【鮫島様】

私の中では日によって通信状況にばらつきがあると感じています。ハナストを使用している時に感じる事ですが、夜間は通信がスムーズに行える気がしますし。日中は通信量が多いのかなと感じてしまいます。又場所によっては電波の状況が悪いということや、充電をしっかりとっておかないと次の業務に支障が出るなどの経験をしっかりと次につなげる事が必要だと思えます。

【広報部】

限定的にやって使い慣れて、次これにして次これにしてっていうそのやり方やっぱいいですね。そのハナストはその記録の入力だけのものなんですか。

【中田様】

内線とかも取れます。なので何か例えばオムツとかやっていた時でも取れるし、そういう意味では本当にその職員間で共有しなきゃいけないリアルタイムで入ってくれば取れるので、事故が起きたときにすぐ知らせなきゃとかリアルタイムで共有できます。

【広報部】

ヘッドセットみたいなのは1人1台？

【鮫島様】

共有です。ただ、自分で持ってきている人とかもいるので繋げることは可能ですね。両耳だと頭が痛くなってしまう人とかもいたりするので、ご自分で用意する人も中にはいらっしゃるんですけどもなんか楽しくなるんでしょうね。なんかそうなる、みんなつけることとか、このヘッドセットいいよとか、今変わってきていますね。

【広報部】

今その楽しくなってきたという発言あったと思うんですけど、どの辺から楽しくなり始めました？



【鮫島様】

やっぱり慣れてきたんです。特に夜間です。夜間が本当に・・・。

【中田様】

彼女のユニットには夜間ほとんど起きていて、転倒リスクも高い方がいます。トイレも介助が必要なので、目が離せなくて付きっきりの方がいらっしゃいます。その方が落ち着く5分くらいで他の方の排泄介助などの支援を行って、終了後すぐその方の見守りを行うような状況の中で、いつ記録が打てるのかという思いがあったようです。そしたら移動のときに入力できた方がいい。それを多分すごく今実感しているんじゃないでしょうか？

【広報部】

眠りスキャンとハナストを今後どういうふうにご利用していきたいですか？
どのような現場にしたいか今後の展望をお聞かせいただけませんか？

【中田様】

難しいですね。眠り S C A N に関してはデータとしての信頼度は今の時点では高度な機器だとは思いますが。それを使って、適切な巡視回数を検討するものとして使ってもらったりしていけたらいいなって思っています。そうするとトイレ誘導の時間やパットの選定等もその人に合わせることができんじゃないかと思えます。良い睡眠をとってほしいなと思うので、その部分で活用できればいいかなとは思っています。ハナストもそうですが、ご利用者の個別性に合わせた支援というものを追求

したいなとは思っています。その為には支援の状況をリアルタイムで記録として入れることによってその排泄間隔とかわかってくると思うんですよ。何時何分と細かく時間も出てくる。そこはプライバシーとか尊厳というのを守りながら、ご利用者の排泄パターンを把握したうえで支援をしながら記録を行い、その人に寄り添う介護が展開できる環境にしていきたいと思っております。

【広報部】

目指すべき介護のあり方があり、そこに賛同しているスタッフがいる。互に教えあい、教わりながら少しずつ次世代介護機器や ICT の利用方法を深めていると感じたインタビューでした。困難に乗り越えても何とかなるといってお互いに歩み寄って考え合う風土がフェニックス杉並の大きな財産だと思いました。

吉水施設長、小寺さん、中田さん、鮫島さん、本当に貴重なお時間ありがとうございました。



新しいテクノロジーの導入で介護現場は変わる

研修実施日：令和4年11月5日 9:30～16:30

報告者：広報部員 田中 宏実

今

回、広報部の一員として「新しいテクノロジーの導入で介護現場は変わる」研修に参加させていただきました。少子高齢化、介護人材の不足、資質向上が注視される中、介護保険制度の改正の度に、I T Cの活用、介護ロボットの導入などが位置付けられてきましたが、在宅介護に携わってきた私にとっては、施設などにおける内容が多いように見え、在宅サービスにおける導入は難しいのではないかと、どこか遠い世界の事のように感じていました。

その一方、連携職種として関わることの多い医療職の電子カルテやオンライン診療といったICT化を目にする機会も増え、迅速、連携、効率化を考えると介護分野でも活用が進むことへ期待もありました。

今回の研修では、実際にICTを導入されている施設での活用、L I F E (科学的介護情報システム)への取り組み、加算の取得による介護報酬の算定について聴講しました。

導入されている見守り介護ロボット、インカム、タブレット端末や排泄測定器などについて詳しく説明頂き、特に見守り介護ロボットのaamsに興味をもちました。

aamsは、センサーをマットレス下に敷くことで、心拍、呼吸、体動、離床の状態を感知、睡眠状況については深い、浅い、覚醒と詳細に感知することができ、リアルタイムでモニターやタブレットに表

示できる機器です。今回、初めて実際に活用されている方の話を聞くことができました。

施設では、睡眠状態から夜間の排泄ケアや巡回のタイミングの調整に活かすだけでなく、体動の少ない利用者へ体位交換の必要性を検討したり、呼吸や心拍の状態から状態変化の把握をしたり、看取り期においては家族への説明に活用されているとのことでした。医療との連携においても、主観的な状況報告だけでなく、数値など根拠のある状況の報告ができることで、早期診断、治療につながっている話を伺いました。

自分で状態を伝える、意思の言語化が難しい利用者は少なくありません。小さい変化に気づくことができる。利用者の理解や介護の質の向上につながる面からもICTの活用の必要性を学ぶことができました。

今後、施設だけでなく、在宅介護分野での導入が進み、利用者一人ひとりのライフスタイルに基づいた生活の実現に活かされること、介護福祉士として自立支援、重度化防止につなげていきたいと思いました。

コロナ禍でオンライン研修も多くなりましたが、対面で研修の開催となり、グループワークでは活発に意見が飛び交いました。施設や病院、在宅サービスなどの介護業務に従事する方のほか、教育分野の方の参加もあり、それぞれの職場の話聞くことができ、多くのことを得ることができた研修になりました。

令和4年度地域ブロック学習会のご案内

今年も地域の皆様方のご協力・ご参加を頂き、各区市町村介護福祉士会・ブロック会は活動して参ります。次回の日程は下記のようになっております。ご参加希望時は下記のメールアドレスまたはお電話にて受付を行います。

介護福祉士会 ・ブロック	実施日時	会場	内容	参加費	担当者名
西東京 ブロック	毎月第3 金曜日 20:00～	オンライン	定例会	無料	徳山・ 渡邊
調布ブロック	令和5年 3月中旬	ZOOM 又は リアル	介護のモヤモヤを 話してみよう 自職場の悩みを 自分の言葉で語る会	無料	小幡
町田市 介護福祉士会	毎月第3 金曜日 18:30～ 20:30	町田市民 フォーラム 4階 第2学習室	定例会 「仲間と繋がってよう」	無料	小林
杉並区介 護福祉士会	1月～各月 での開催	未定	未定	無料	溝呂木

● 内容以外の問い合わせ：公益社団法人 東京都介護福祉士会 事務センター
東京都新宿区山吹町358-5 TEL：03-6824-9397 FAX：03-5227-8631
メール：tokaigo-seminar@bunken.cp.jp ホームページ：http://www.tokaigo.jp/

編集後記

皆さん如何お過ごしでしょうか？最近では周りを見渡せば季節も冬となり、紅葉もいつの間にか落葉となりつつあります。コロナ禍もいまだ落ち着かない状況で2年以上になりました。コロナ感染を未然に防ごうとする状況下で皆さんが日々業務で、大変苦勞をされていることは痛感しております。東京都介護福祉士会としても研修開催にあたり、感染症対策を行いながら、小規模での開催が少しずつ始められるようになりました。大変な時だからこそ、「ALL FOR ONE」「ONE FOR ALL」の精神で寄り添えるような活動を目指していきたいと思っております。今後とも当会の活動に御協力の程 宜しくお願い申し上げます。

広報部員：篠塚 真一

発行：公益社団法人 東京都介護福祉士会

本部：〒135-0003 東京都江東区猿江1丁目3-7 パークノヴァ猿江恩賜公園

TEL：03-5624-2821 FAX：03-5624-9650 E-mail address：info@tokaigo.jp

※掲載原稿、および写真の無断転用を禁じます。